



生物多様性インタビュー

岡安 直比 さん

WWF ジャパン 自然保護室長
(財団法人世界自然保護基金ジャパン)



サルに憧れて、京都大学でヤクザルやゴリラの研究をされてきました。特に、ゴリラに関しては、『子育てはゴリラの森で』（小学館）や『みなしごゴリラの学校』（草思社）を著されています。著書の中で紹介されていますが、フィールドだったコンゴ共和国で97年に内戦が勃発し、戦火の中を娘さんとゴリラ数頭を連れ出した逸話は圧巻です。

現在、WWF ジャパンで自然保護室長を務めていらっしゃる岡安さんに、WWF での取組を中心に話していただきました。

◆ 霊長類に関心をもたれた“きっかけ”を教えてください。

きっかけというか、最初にアフリカに行きたいというのがありました。私は、1960年生まれなので、幼稚園から小学校に入る頃は、ちょうど日本が高度経済成長に入る時期でした。一般家庭にテレビが普及し始め、私の家にもテレビがお目見えしましたが、アフリカの動物、ジャングル、サバンナなどを紹介する『すばらしい世界旅行』や『野生の王国』といった番組にすごく惹かれました。当時から動物が好きで、中でも野生の大きな動物を見たいという気持ちが強かったように思います。

小学校の中学年から高学年ぐらいになって、図書館にいろんな本が出るようになりました。最初に興味を持ったのは人間の進化で、火を使う北京原人やジャワ原人の謎といった本を読みながら、自分がどこから来たのかということにすごく興味を持ちました。サルから人間になった、その境目の化石の証拠が見つからない、いわゆるミッシングリンクと呼ばれるところの共通の祖先がどんなものか、ミステリアスに感じました。

ちょうどその頃、ジェーン・グドールさんというイギリス人の女性研究者が書いた『森の隣人—チンパンジーと私』という、チンパンジーを森で観察しながら彼らの社会生活を探る本とか、私の恩師の伊谷純一郎先生¹が書いた『チンパンジーを追って』という、両方とも小学校高学年向けの本が出版されたばかりで、夢中になって読みました。

もともと興味があった人間の進化と、動物が好きという2つが上手く交じり合う研究分野があるんだということを初めて知り、霊長類というか、やはりサルを見るのが面白いんじゃないかと気づきました。それが“きっかけ”です。

¹ 伊谷 純一郎 (いたに じゅんいちろう、1926-2001)、日本の生態学者、人類学者、霊長類学者。京都大学名誉教授。今西錦司の跡を継ぎ、日本の霊長類研究を世界最高水準のものとした。業績は高く評価され、1984年に「人類学のノーベル賞」と称されるトーマス・ハックスリー記念賞を日本人として初めて受賞。



◆ 京都大学を目指されたのは、伊谷純一郎先生の影響が大きかったですか？

それは大きいですね。あの頃、いわゆるフィールドワークをする霊長類学の創成期で、京都大学では1958年からアフリカの調査を始めました。その調査が軌道に乗り始め、1970年代に成果がすごく出てきました。伊谷先生の教室もそうですし、あとジェーン・グドールさんのそれこそ道具を使うチンパンジーとかそういう新しい発見が続いたところで、人間ってやっぱりサルなんだなって感じました。霊長類の研究は、実際に目の前で見られることから、ものすごく面白そうだなと思った記憶があります。そうは言っても、普通の子供でしたから、中学・高校生の頃は、バスケットボールに明け暮れていました。大学を選ぶ際に、もう一度何がしたいのかを考え、駄目もとでいいから、伊谷先生の研究室を目標に京都大学にチャレンジしました。

京都大学には運良く受かり、1983年からアフリカに行くまでの10年ぐらい、ヤクザルの研究のため屋久島に通いました。その間、結婚・出産・離婚を経験しました。屋久島での調査は、独身のころから永田という集落を拠点に、ほとんど暮らすような感じでしたが、ただ、山に通うだけじゃつまらないので、郷土史研究会みたいなのに入ったりして、そこにたまたま若い奥様が来られていて、その方と仲良くなったりしました。あとで子連れで行くようになると、彼女のこどもが同じ年なもので、「いいわよ！預かってあげるから、あなた山へ行ってらっしゃいよ」みたいな感じで、調査を続けました。

◆ 屋久島で知り合った方に子供を預かってもらって調査を続けるってすごいですね。また、研究室で授乳もされたとか…

京都では、飲み友達のシングルマザーがいっぱいいました。アフリカの調査は科学研究費という家族を連れて行けない前提の調査でしたので、娘を日本に残しました。アフリカへは計3回行きましたが、その内の一回は、京都の友達に3ヶ月間預かってもらいました。割と好き放題やってしまったね。(笑)

昔の方がそういうのは逆にやり易かったですね。今の方がもっと個人主義といえは聞こえはいいですけど、何か地域のコミュニケーションがますます阻害されている感じですよ。

うちの研究室には、女性の研究者がほとんどいませんでした。でも私は本当に運が良いんですけど、子供を生んだ1986年の前後に、先輩の奥さんたちが山盛り子供を生んだので、周りにお手本がたくさんいました。ゼミやゼミ以外にも山菜取りに行ったり、夏でビールが美味しい季節だったらビアガーデンをやったり、そういう研究室でしたので、その時に奥様方が出かけてくるんです。奥さん達がガバッとこう開けて授乳すると、わざわざ隠れてなんかやらないみたいな感じで、ゼミ室で20、30人でわいわいやっている、2、3人がその辺でオッパイを飲ませていました。私も人前で授乳することには全然抵抗はありませんでした。

◆ 生物多様性の重要性について、一般の方に理解しやすくするためにどのような工夫をされていますか。

特にこのご時勢なのかもしれませんが、「生物多様性」って何ですか一言で教えてく



ださってという期待をする人がすごく多いんです。自分でまず何かって考えるんじゃなくて、知ってそうな人に教えてもらう。しかもかいつまんで分かりやすく教えてもらうっていうのを当たり前で期待されるので、まず最初にカウンターパンチとして生物多様性って難しいですよと申し上げます。

というのも、言葉の中にあるように、「多様性」なんだから、多様であればあるほど価値があるっていうものなんだと。ですから自分の身の回りの自然が、他と違えば違うほど価値があるっていうのが生物多様性の概念なので、自分の周りの自然が何かっていうことを感じ取れないと、生物多様性って分からないですという話をします。ただ、そうは言っても日本人はまだまだ、そのセンスを他の国の人たちに比べたら、ずっと無意識のうちに持っている民族なんですという話をします。

生物多様性について話す際、最初は、私が一番付き合ったアフリカのゴリラから始めます。やはりアフリカの自然は、スケールが違うんですね。熱帯多雨林といっても日本の6.2倍もありますし、なおかつ動植物の種数ものすごい。一応私は向こうで自然保護のNGO職員として働いていたにもかかわらず、自然保護をするといった時に、管理をするという考え方が通用しないっていう感じがしました。

例えば、私も何度か死に損ないましたが、病気一つとっても、現地にはマラリアという下手をすると死んでしまう病気が、風邪みたいに季節の変わり目に流行ったりするんです。子供たちの乳児死亡率、幼児死亡率が高いのは、そのマラリアのせいですが、マラリアの他に、エボラ出血熱や特殊なケースですけどエイズもあります。ありとあらゆる病気があって、マラリアが一番典型的ですが、現地の人あまり薬を飲みません。もちろん酷くなった時には飲みますが、マラリア菌が耐性を持つことを避けるため、現地のお医者さんはなるべく薬を飲まないように指導します。

マラリア菌というのは、肝臓の中に卵が残るので、熱がおさまっても原虫が血の中にいる人は結構います。とにかく、マラリア菌と上手にバランスをとって暮らすのがアフリカの基本的な考えです。毒性の強いマラリア菌を撲滅できる薬は開発できるでしょうが、結局、たちごっこになって、下手すると人間の体も死んでしまいます。

まず、一番に考えなければいけないことは自然とバランスをとることだと思います。かつて一緒に働いていた欧米の友人にはなかなか通じませんでしたけど・・・

それは、何故なのか。私も13年ほど海外で暮らしているいろんな人と話しましたが、やはりヨーロッパ、特に白人の人たちはキリスト教の考え方が身に染みついています。生態系ピラミッドがあって、植物があって、植物を食べる草食獣がいて、草食獣を食べる肉食獣がいて、肉食獣でも高次の肉食獣がいて、人間がいる。人間の上に神様がいるという感覚です。人間は神様の下にいる高次の動物だから、それ以外の動物を管理しなければいけないと思うみたいです。でも、実際に草食獣が増えすぎて植物が減ったから、草食獣を少し減らそうとすると、途端にバランスが崩れて、余計な植物まで増えるということが結構起こります。

日本は数ある先進国の中で唯一自然が豊かに残っている国で、アメリカは大陸が大きいので別ですが、ヨーロッパにはほとんど自然が残っていません。ヨーロッパが一神教の国であるのに対して、日本は多神教の国で、身の回りのどんな小さなものにも神様が宿っていて敬意を払い、あまり人間だけが出すぎたことをしないという感覚を



自然に持っています。ですからその結果として自然を守ってきた。今「里山」がどんどんクローズアップされて、そこに八百万の神が宿っているというお話は、岩槻邦男先生のお話とまったくかぶります。

アフリカにはもっとすごい方の神がいます。日本の神様とはニュアンスが違って、とにかく人間以外の魂があり、良いことも悪いこともする。だから悪いことをしそうな魂をなるべく宥めて、良いことをしてくれるようにしようという感覚があります。

また、森へ入るときの知恵、すなわち村の長老からずっと先祖代々受け継がれたいろんな知識があって、卑近な例で言えば、このきのこは食べられてこのきのこは食べられないという話もそうですが、森へ入って動物が死んでいると、死に方をちゃんと見ろと言います。死に方と何日前に死んだかと、それから死んでからの状態を良く見て、すごく新しくて怪我をして死んだのが明らかで、例えば眼が何か変になってないかとかそういうのを全部見て大丈夫だったら食べても良い。でも、ちょっとでも病気の心配があったら食べるなっていうこととか、この動物はこういうふうには食べられるとか、この毒蛇はここのところさえ取れば大丈夫とか、そういう細かい知識をものすごく持っています。それは猟師さんだから出来るとか、そういう専門家に分かれてなくて、森に依存して生きている人たちはみんな当たりまえに、自分の裏庭みたいな森の中で何がどこにどうあって、どの生き物にも自分たちにとって良いところも悪いところもあるということ、ちゃんと感覚として分かっています。

日本人にもあると思いますが、あまり物事の黒白をはっきりつけたがらないという感覚があって、それが結果的に上手にバランスをとるというところに結びついてきたと思います。日本の自然も割りとそういうところがあって、上手に使うと非常に良いけれど、やり過ぎると逆に仇をなすみたいなどころがあります。山の暮らしでも、例えば木を伐るときに、いろんな種類の木を少しずつ伐れば上手に再生して、水を溜めてくれるのが非常に上手く行くけれど、一度に同じところをガバッと伐ると駄目になるという話は、高度経済成長の前はみんな当たり前に分かっていました。屋久島でも、30年前ですが、サル小屋の前にあった学校の先生方の宿舎の方でも、風や雲の動きで降雨や釣り日和を予想することができましたし、自然というものが移りゆくもので、すごく多様な世界があることをわざわざ意識しなくても、それぞれの人が当たり前に身につけているものでした。それが生物多様性なんだっていう話をします。

もう一つ、日本の“自然観”について、昔話を通してお母さん達に話をする機会を多く持ちました。昔話には、例えば、サル、シカ、クマなどが登場しますが、生態系でいえば高次の動物たちが当たり前に裏山に棲んでいるというのは、先進国の中で日本しかなくて、こういう動物を支えるための下にある実に様々な動植物がしっかりしている証拠ですという話をします。(図1)

屋久島ではヤクザルが家に勝手に入っ

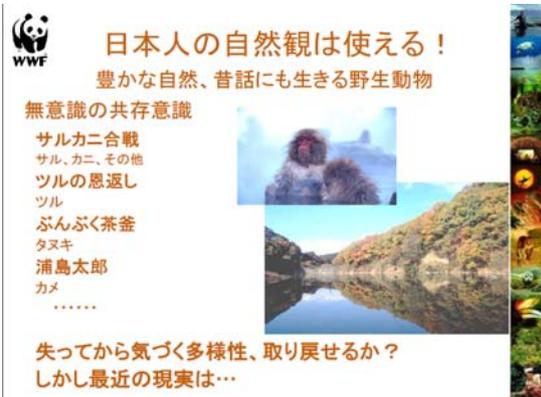


図1



てきて、お櫃からご飯たべて帰ったりするんですよね。そういう話も、私がフランスにいる時にフランスの方に話をすると、本当に別世界のものを見るような感じで、自分の知らないものだからすごく興味を持ってもらいました。でも、フランスにいる日本人の方と集まって話をしていると、私と同年か、ちょっと上ぐらいの方が多かったせいもありますが、自分の思い出話を始められるんです。例えば、西関東のご出身の方がいられて、サルなんか日常茶飯事で、ふっと気がつくとき裏のドアを開けて米櫃から米を食べちゃったというような。それを怒るんですけど、本当に仕様が無いわね、まあ少しは分けてあげようかしらという気持ちがあるけど、人間だけが全部独り占めしなければいけないという感覚があまりなくて、自然に許してやるかみたいな余裕があるんです。日本人はそもそも動物と一緒にいるのが、当たり前の世界だになっていう感じがします。

後もう一つは、図1の写真は奥多摩だと思いますが、これを見て日本人は綺麗だと思います。秋になると紅葉を見に行きたいと、ごく自然に思う。いろんな色の紅葉が混じっていることが綺麗だと思う感覚がすごくあります。例えば、これがモミジの赤一色だったら、たぶんそれ程綺麗だなんて思わないですよ。緑の中にいろんな、しかもそれが水の上に映って、ぼかされた色になる。多様な色が混じることが日本人は美意識として自然に綺麗だと思う感覚がありますね、という話をします。

これも結局私はヨーロッパにいたから、気がつきました。ヨーロッパの例えば絵画や芸術が好きでフランスの友達に、これ綺麗だと思わないって言っても、どこがって感じだったりします。どの色も何となくぼんやりしていて、あまり突出した鮮やかな色がないので、印象に残るところがないらしいんです。もちろん、中には違う人もいますけど・・・

さっき申し上げましたが、昔話のちょっと有名なものを並べただけでも、これだけ野生のものが出てきます。しかも、それぞれの話に出てくる動物の種類があまりダブリません。「サルカニ合戦」だと、サルとカニの他に臼が出てきます。臼って木ですけど、木まで擬人化してしまうっていうのは日本人ぐらいだと思います。

「ツルの恩返し」、「ぶんぶく茶釜」、「浦島太郎」に登場するのは、鳥類、哺乳類、爬虫類と何でもありみたいな感じですね。サルは大抵悪者ですが・・・(笑)

他にもいろいろありますが、ヨーロッパと比べると、バラエティーがぜんぜん違います。ヨーロッパで代表的な昔話とか童話の動物は、例えばあかずきんちゃんやシンデレラ姫に出てくる狼ぐらいのものです。狼は悪者なんで、とにかくやっつけて殺すものっていうイメージしかありません。日本では、サルが尻尾をなくしてしまう程度で、殺してしまうようなところまで行き着かない。せいぜい懲らしめる程度です。

以上のように、日本人の生活の身近なところを振り返って、これだけ自然に囲まれますねという話をした後に、ちょっと話は生物多様性から外れるかも知れませんが、「子育て」についてこんな話をしています。

そもそも人間も動物の仲間なので、なるべく生れ落ちてから体が育つ5~6歳までは、動物として体を鍛えた方がいいという話をします。昔は「子供は風の子、大人は火の子」と言いました。何はなくても子供は外に放り出して、普通に皮膚から入ってくる自然の感覚を大事にする。とにかく外に行けと言って家から追い出されたもので、ど



んなに暑かろうが寒かろうが、一年中同じ格好をしてなお平気というのが子供のはずだったんです。1992～2004年までの間、海外で子育てをしましたが、バブルの時代に日本は社会構造というか、子供の育つ環境がすごく変わったと思います。

例えば、家族のところに数年前に息子が生まれましたが、大晦日に生まれたので元旦にお見舞いに行きました。そこはごく普通の病院でしたが、「赤ちゃんは大変デリケートだから、室温は27度に保ちましょう！」って書いてあるんです。元旦に27度。エアコンの吹き出し口みたいなところにベビーベッドが置いてあって、生まれたての赤ちゃんがゴウゴウ暖房で暖められて、さらにオクルミに入ってモコモコになっている。すごいなって思いましたけど。一方、この病院、夏は23度ぐらいでガンガン冷房を効かせているんだろうなと想像しました。

赤ちゃんは、生れ落ちて最初に自分が生まれたって感じるのは、温度しかありません。肌で感じて、初めて泣くので、気温というのはもっとも自然に近いものにしてあげなければいけない。でも現実には、最も反対のことをしている。新米のお母さん達は、とにかく赤ちゃんはデリケートなものだからっていうことを刷り込まれて、家に帰ったらエアコンの中で育てるわけです。

そもそも、刺激を受けて神経を訓練して発達しなければいけない一番大事な時に、何の刺激も受けないと、馬鹿になると思うんですよ。そういう育て方しているお母さんに「馬鹿になりますよ！」って言うんです（笑）。ですから、今のお母さんはね、なんていっているどころじゃなくて、本当に危ないと思います。こどもが切れやすくなったとか言いますが、それは矢張り動物としての訓練を当たり前を受けずに育っちゃうからなんだと思います。

13年間日本にいないで帰国したら、小学校中にエアコンが付いていますよね。あんな中で子供は絶対鍛えられません。その辺をどうしたら良いのだろうって、本当に今の立場からもすごく考えます。

結局、私はサルに興味を持って、サルの発達の仕方を見ながら子育てもしてきました。動物が育つのは、まず生まれてから体が出来上がる、人間だったら、5～6歳ぐらいですね。とにかく、体を鍛えなければいけないので、なるべく自然の中にそのままいて、体中に刺激を受けるべきだと思います。一旦体が育つと、こどもは母親とか家族と過ごす時間はむしろ減って、今度は同じ年ぐらいの仲間との社会的なコミュニケーションを覚えていくっていう段階に移ります。

うちの娘は今24歳ですが、私が子育てをしていた頃、最近の若いお母さんは、そもそも兄弟が少ないから、赤ちゃんを観る場面に立ち会ってなくて、すごく頓珍漢なことをするって話題によくになりました。例えば、赤ちゃんが生まれて、病院からおうちに帰って一番最初にオムツを取り替えるときに、青いおしっこをしなかったって言って、病院に駆け込むお母さんがいたんですよ。紙おむつの宣伝で青い液体を吸収させるのを見せるじゃないですか。あれを見て青いおしっこをしなかったから、うちの子おかしいのじゃないかって思ったらしいんです。本当にそれが普通に噂になるぐらい、そういう勘違いをする人がいっぱいいたんです。後は、オレンジのおしっこが出たとか、赤いウンチが出て、下痢をして血便じゃないかって心配したけど、実はトマトジュースのせいだったとか。そういうことが当たり前と言われていて、最近の日



こと、日本が輸入するパルプ材がタスマニアのインコの生息環境を悪化させていることなどが分かります。

2008年と2009年のエコプロダクツ展のブース展示で、図を使ってクイズ形式でお話ししたところ、多くの方に生活と野生動物との繋がりに気づいて頂くところまでは行きました。でも、問題の解決方法について考えてもらうところまでは難しいということが課題となりました。

WWFでは、2年に一度「生きている地球レポート」を公表しています。みなさんに生物多様性とは何か、世界の生物多様性がどうなっているかということをお知らせするのに最適な資料です。

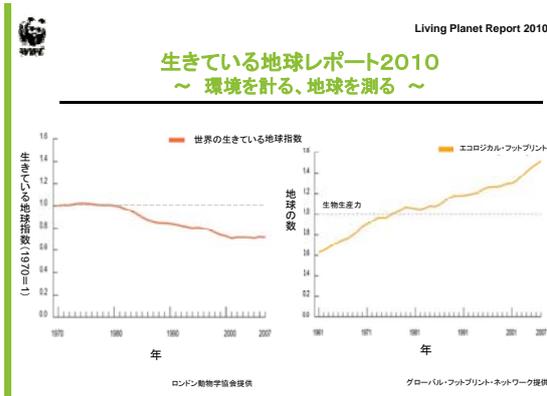


図 3



図 4

10月14日に、新しいレポートを発表しました。その中で、WWFならではの持ち味として、『生きている地球指数』と『エコロジカル・フットプリント(EF)』という2つの指標を使って、地球環境の実態を分かりやすくお見せしています。(図5)

『生きている地球指数』は、世界中の8,000近くの個体群のデータを集計して、生物多様性の変化を図化しています(図4)。中には急激に個体数を増やしている動植物がいる一方、急激に減少しているものもあります。もちろん、この中に希少種も入っていますが、普通にどこでも見られる種も取り上げています。

それらを集計し、1970年を1とすると、現在では同指数が30%減少していることが分かります。もちろん、1970年の段階で、既に先進国の大部分の個体群動態に関わるデータは減るだけ減っている場合が多いと思いますので、あくまでも1970年という一つの時期を指標にしています。(図3)

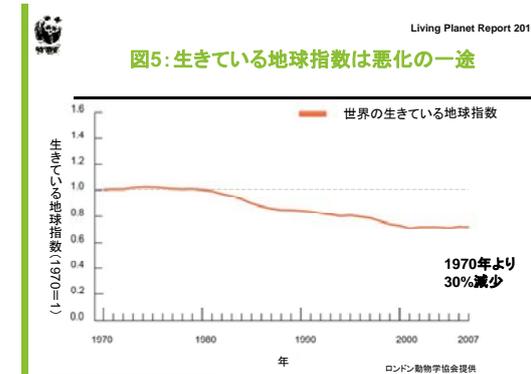


図 5



図 6



同指数を用いて全体で見ると、先進国は現時点で増えていますが、もう少し細かく見ていただくと、例えば熱帯地域の特に淡水生態系が 69%の減少と非常に疲弊しています。その原因は何かということ、身近なことに引き寄せて考えて頂くために、『エコロジカル・フットプリント (EF)』を使って説明するようにしています。(図 6、7)

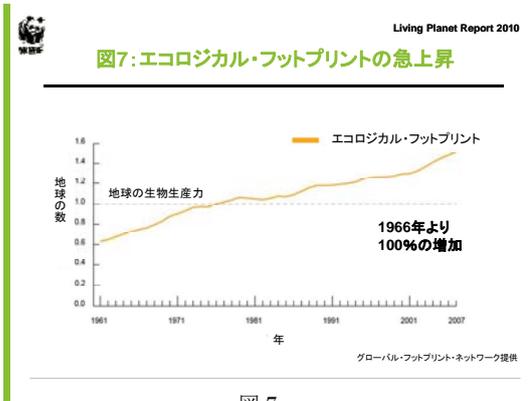


図 7

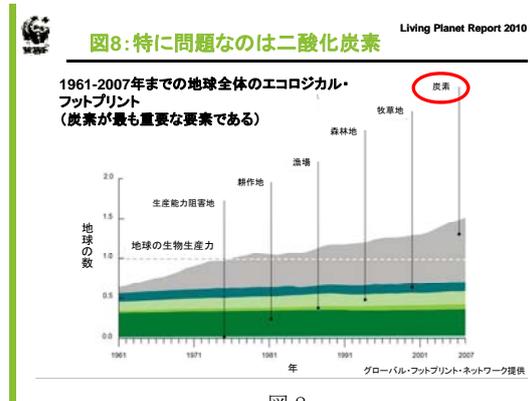


図 8

人間の消費活動の 6 つの要素 (農業(穀物)、牧畜、林業、漁業、化石燃料、建築) を全て土地面積に換算してみると、一人当たり 2.7gha も使っているということが分かります。地球の生産力が一人当たり 1.8gha しかないので、これは地球 1.5 個分、言い換えれば将来の生産力を今食いつぶしている、ということになってしまいます。さらに日本人の生活を全世界の人がしたら、地球 2.6 個分必要です。

両方の指数を並べると人間の消費活動が地球環境を圧迫している、地球に対して、特に CO2 が悪影響を与えているということが分かります。(図 8)

しかもそれに加担しているのは、そもそも 1960 年にはほとんど発展し終えたはずだった先進国で、さらにその後も環境に負荷を与え続けているということです(図 9)。

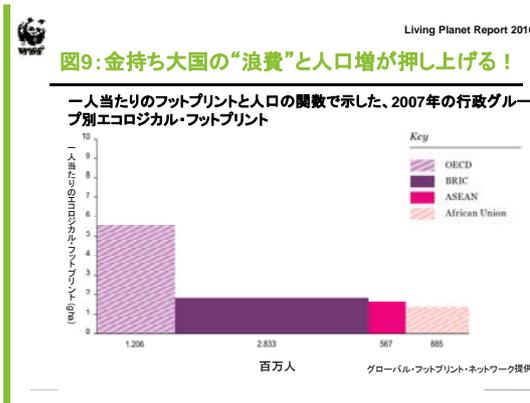


図 9

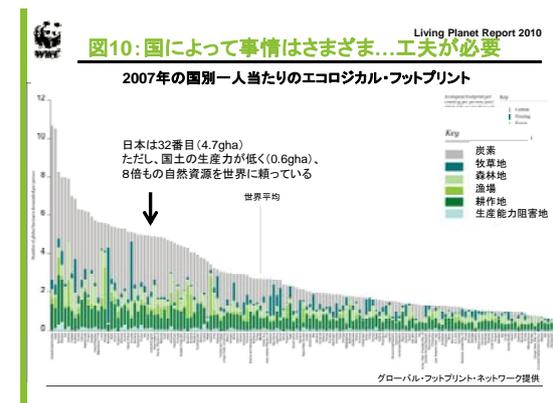


図 10

1961 年の段階では、世界の EF は地球の生物生産力の半分でしたが、現在、EF は地球全体で 50%超過しています。日本を見ると EF は 4.7gha、世界で 32 番目ですが、ただ問題なのは日本の国土は生物生産力が非常に低く、0.6gha しかありません(図 10)。したがって、日本は国土の生物生産力の 8 倍も使っていて、生物生産力と EF を対比させて、土地面積に作り直すと、メタボジャパンがもう明らかであり、やはり、G6 の国々



がものすごくメタボだということが一目瞭然です。その皺寄せが、途上国に来ています(図 11)。



図 11

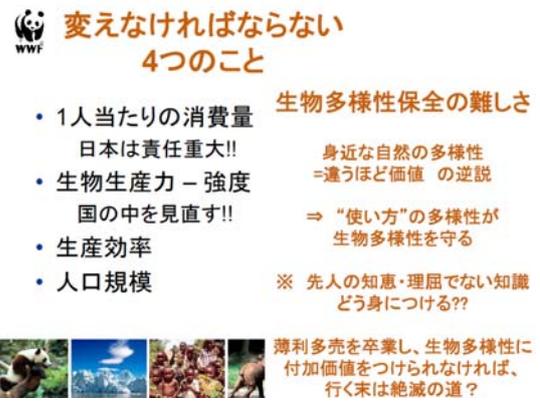


図 12

「変えなければならない4つこと」として、まず日本は「消費量」を何とか減らさなければなりません(図 12)。本年 8 月に、日本の EF 報告書 (2009 年版) を出しましたが、実際の消費の中で、個人消費が特に大きい割合を占めています。中でも食糧が全体の 4 分の 1 という結果が出ました。食糧について、環境省や農林水産省が試算したところ、例えばカロリーベースだと 30%ぐらいがただ無駄に捨てられているというデータがあるので、その 30%を無駄が出ないようにするだけでも、EF が何十万 gha も減るといような試算ができます。ですから、消費を減らすために我慢をするというよりは、もっと適正な流通形態を作って、無駄が出ないような仕組みを整えるだけでも相当負荷は減らせると思います。また、生物生産力をアップするためにも、例えば耕作放棄地の問題を改善していく努力が効果的である、というような話をします。



気がついたらオオツノジカ!

人間の欲望は、地球を超えて膨らむばかり... 賢い選択とは?

- 地球がたった1mの球だったら人間の生活圏は2mm
- 地球が生まれて24時間だったら人間が生まれたのは 23:58
- 人間が生まれて30億人になるのに400万年
30億人から60億人になるのに40年



オオツノジカ (*Megaloceros giganteus*)

- 肩の高さ: 2m
- 時代: 新生代洪積世後期(35~1万年前)
- 角が大きくなりすぎて、動けなくなり絶滅

図 13

最後に、一般の方にオオツノジカの例を挙げると、結構実感を持っていただけます。人間が今行っていることは、例えば地球が生まれてからこれまでの時間を 24 時間に置き換えると、人間が誕生したのは 23 時 58 分ですから、ついこの間生まれたばかりの赤ちゃんが、とんでもない悪さをしている状態ですよと説明します。将来にも人間が生き残れるようにするためには、何とかしなきゃいけないですね。

2010. 9. 16 インタビュー

聞き手: 田村省二 (COP10 推進チームリーダー)



岡安直比 (おかやす・なおび)

1960年、東京生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程終了。85年結婚、翌年、娘・早菜を出産。屋久島のニホンザル研究の傍ら、88年と91年にはザイール共和国（現・コンゴ民主共和国）でピグミーチンパンジーの研究も手がける。92年からはコンゴ共和国で、ゴリラの孤児を森に帰すプロジェクトに参加。97年に内戦が勃発し、娘とゴリラ数頭を連れて戦火の中を脱出。その後、娘とともにパリに移住、2004年に帰国。2004年に世界自然保護基金の自然保護室長、現在に至る。著書に『子育てはゴリラの森で』（小学館）、『みなしごゴリラの学校』（草思社）

